

2026年4月26日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教79 「共に住む神」

ヨエル4：16～17、ヨハネ14：18～24

「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」（18節）とあります。とても印象的な言葉です。「みなしご」と訳されている言葉オルファヌースは、親のいない子どもという意味です。口語訳聖書では「孤児」と訳されました。ふと思い出したのですが、神学生時代に世田谷にあります東京育成園という児童養護施設に子どもたちの礼拝のために通ったことがあります。東京育成園はキリスト教主義の施設ですが、同級生からの紹介で一年くらい通いました。今、改めて思うのは、様々な事情を抱え、親から離れて生活する子どもたちがどういう思いで聖書の話を知っていたのだろうかということです。それぞれ自分は親から捨てられたと思っている子どもたちもいたかもしれません。そういう子どもたちの心に聖書の言葉はどのように響いたのでしょうか。

聖書のメッセージは、わたしたちが神さまの子どもとされることです。「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです」（ガラテヤ3：26）とあります。だからこそ「天の父よ」とわたしたちは神さまに向かって祈ります。けれどもそれまで、わたしたちは神さまから離れ、それぞれみなしごの状態でした。放蕩息子のたとえ話にあるように、自ら父親のもとを飛び出したのです。「もう息子と呼ばれる資格はありません」と息子が言う通り、わたしたちは胸を張って神さまの子であるとは言えない者でした。それが聖書の示す罪です。けれども神さまはそのようなわたしたちをもう一度神さまの子どもとしてくださいます。「あなたがたをみなしごにはしておかない」のです。そのために大切な独り子イエスさまをこの世にお遣わしくされました。そしてイエスさまの十字架とよみがえりにより罪を贖ってくださり、わたしたちを神さまの子として迎えてくださいました。それが聖書の示す救いであり、そこに何より神さまの深い愛が表れています。

愛することは、どこまでも関わりを持つことです。「わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である」（21節）ここにある「わたしの掟」とは「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」（15：12）とあるように互いに愛し合うことです。しかもその愛はイエスさまが弟子たちの足を洗われたように、互いに足を洗い合うこと。相手の良いところだけではなく、その汚れも引き受けることです。そこに真実の愛があります。そしてその愛は、イエスさまがまことの人となられ、最後は十字架の死に至るところまで徹底されます。愛することは、決して生易しいことではありません。きれいごとでは済まないのです。わたしたちの家族に対する愛はどうか。本当に相手を愛しているのか。その愛が問われています。

しかしここで重要なことは、その愛はわたしの中から絞り出すようにして生み出していくものではないということです。わたしの中の愛などはすぐにも枯渇してしまいます。愛することに常に限界があります。けれども決して尽きない愛がある。その愛の源泉こそイエスさまなのです。「わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す」（21節）互いに愛し合うことができる人はイエスさまを愛している。イエスさまを愛している人は、父なる神さまからも愛される。イエスさまもその人を愛される。わたしとイエスさまと父なる神さまが互いに愛し合う。ある人はこのところを「愛の鎖」と言いました。

わたしとイエスさまと父なる神さまの愛が絡み合う、鎖のように愛が入り組むようにして、愛することを可能にするのです。

そのことがよく表されているのが23節です。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしはその人のところへ行き、一緒に住む」わたしたちが誰かを愛することができるようになるために、神さまが私たちのところに来られて一緒に住むのです。「一緒に住む」と訳された言葉ポイエオーは、「行う」とか「実行する」という意味で、強い意志を持ってそこにいるということです。まことの神さまがまことの人となられ、この世に来られるというのは、生半可な気持ち、単なる思いつきのようなことではありません。それこそ意を決して、強い意志を持って来られるのです。そこに神さまの愛がもっともよく現されました。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネ3:16)

この後、讃美歌218番「日暮れてやみはせまり」を歌います。この讃美歌は前の讃美歌では39番、夕礼拝の讃美歌としてよく歌われたものです。けれども歌詞の内容からすれば「日暮れて」は単に夕暮れ時を意味しているわけではない。これは人生の暮れ、最後の時に、わたしたちが切に願うことを歌っているものです。それはイエスさまが共におられることです。「主よ、ともに宿りませ」と歌います。これはこの讃美歌を書いたイギリスの牧師ヘンリー・ライトが、ルカによる福音書のエマオの途上の話からインスピレーションを得て書いたものと言われます。よみがえりのイエスさまがエマオに向かう二人の弟子に出会う。弟子たちはイエスさまに「一緒にお泊まりください」と無理に引き止めます。この讃美歌を書いたライトは、この詩を書いた時、病床にあったと言われます。またライトは幼い頃に両親を亡くし孤児でした。それでもライトは努力してやがて牧師になり教会に仕えました。多くの試練の中で彼を支えた信仰こそ、イエスさまが来て、共に住んでくださるといったことだったのでしょう。

孤独を感じる時も、死の闇が迫る時も、自分は誰かから捨てられたと思う時も、イエスさまが共におられる。わたしたちがそのことを願う前から、それ以上に、イエスさまがこの世に来てくださり、共に住んでくださいました。だからこそ、この神さまの強いご意志に引っ張られるようにして、わたしたちも誰かの側に来て、共に住む。誰かを愛することが可能になります。わたしの中にはそのような強い愛はないかもしれない。けれども神さまが共に住まれ、わたしたちを愛の業へと進ませるのでしょう。そのために弁護者(パラクレートス)である聖霊がわたしたちを助けます。

天の父よ。愛せない弱さがあります。けれどもだからこそ、イエスさまが来てくださり、共に住んでくださいました。十字架でその愛を注ぎ尽くしてくださいました。イエスさまと共にわたしたちも愛の業へと押し出されてまいります。どうぞこの一週間も神さまを愛し、隣人を愛する業へと進ませてください。主の御名によって祈ります。アーメン。